

現代社会と真宗教化

有縁をひらく

—高齢者施設の現場から見えること

話し手：寺西伊久夫さん（第一組 佛聲寺） 小川正幸さん（第二十二組 隣朋寺）
 堂宮淳賢さん（第二十四組 長誓寺） 田中智教さん（名古屋別院職員）
 聞き手：大河内真慈（教化センター 研究員）

厚生労働省の推計によると、二〇二五年には高齢者（六十五歳以上）が人口の三〇％に達すると見込まれている。超高齢化社会に備え、二〇〇〇年四月に介護保険制度が導入され、私たちの住む名古屋教区でも高齢者福祉施設が増加した。名古屋教区・別院では、介護保険制度施行以前から、高齢者福祉施設へ出向く教化事業が進められてきた。今後ますます加速するであろう急速な社会変化に対し、僧侶や寺院がどのような役割を果たせるのかを、高齢者福祉施設での教化に関わってきた方々からお話を伺った。同朋社会の顕現を願い、本号に掲載します。

—高齢者を取り巻く環境が急速に変化しています。

寺西：介護保険制度が導入されて以来、高齢者施設は年ごとに増加しています。避けられないことですが、高齢者施設では毎年一定の割合で入所者がお亡くなりになります。それに伴って、身寄りのない方の葬儀も目立つようになりました。このような方の葬儀執行やその後のお骨の取り扱いなど、施設では新たな問題を抱えています。

小川：日本の社会では「老親のお世話」が家族がするのは当たり前という考えが根強くあります。高齢化社会の中で、色々な事情を抱えて介護に関わることが困難な人たちの実情が見えたことで、多様な家族の形があつていいことも認知されるようになりました。しかしその反面、家族という日常の中で、日々古い、病み、いのちを終えていく姿が見えなくなつてい



現在、愛知育児院の理事長を務める寺西さん 20年ほど前から高齢者施設の運営にも関わっている

くことになります。

—施設の増加や家族形態の変化は、寺院にどう影響していますか？

寺西：近年の傾向ですと、在宅の高齢者



かつて別院「巡回法話」を社会事業として推進された小川さん 現在も施設に赴いている

はデイサービスやショートステイから施設の利用が始まり、家庭での生活に支障をきたすようになると、ご家族の希望も加わって、ケアハウスや特別養護老人ホーム、グループホームなど、高齢者施設を終の住処として入所されるケースが一般的です。ライフスタイルの変化に伴って、家庭での介護負担が大きくなっているのも事実です。

考えたいのは、高齢者が施設に入所することにより、家庭や地域から切り離されてしまうこと。入所には家族形態の変化など、それぞれの事情がありますが、亡くなるまで施設を利用される方がほとんどなので、その間に住み慣れた地域社会から忘れ去られてしまう傾向にあります。人生百年時代を迎えた超高齢化社会では、このような背景も手伝って、葬儀の形態が家族葬や個人葬などにつながっているのだと感じています。

田中：施設で働いている友人から、長年入居していたお年寄りの葬儀の際、遺族より施設の職員が大勢泣いていたことがあつたと聞きました。血のつながった家族であっても「共に生きた」ということがなければ悲しみも生まれてこない。大切な人の死を通して、どう生き、どう死ぬのかということを考える機会も現代では失われつつあるように思います。

堂宮：以前、施設で正信偈をお勤めした時、重い認知症の方たちが思いがけず一緒に生き生きと声を出されたことが何度もありました。御本尊に手を合わせたり、法要に参加することで、自分が歩んできた人生を思い出し、尊厳を回復する機会になつていると感じています。

しかし最近ではそういうお年寄りも減つてしまいました。それは御本尊に手を合わせる生活を体験してきた方が減少していることの表れだと危機感を感じます。

小川：お内仏のお給仕がお年寄りの大切な役割であつたことの意味が、ようやく分かるようになりました。晩年を施設で暮らすお年寄りが増えたことにより、お内仏を通じて亡き人たちに思いを寄せながら生活する人が家庭から抜けてしまいました。そのことが月忌参りの減少、仏壇の縮小、ひいては墓じまいにもつながつてきているのではないかと思うのです。

—難しい状況に対し、具体的にどのような教化活動や関わり方を？

堂宮：私に関わっている「あいふるの里」では、年二回の彼岸会法要に加え、毎月別院から「巡回法話」として教区内の僧侶が派遣されています。

私はお年寄りだけでなく、日々介護に勤しまれている職員さんのことも気にかけて話をしています。法話の後で雑談し、感想などを聞かせてもらっています。

小川：十九年前、七十六歳の父親が要介護5と認定され、毎週一回介護ヘルパーが様子を見に来られました。その時ヘルパーさんが父親に赤ちゃん言葉で話しかけていて、大きな違和感を覚えました。

今、毎月介護施設でお話をさせていた
いていますが、年輩の人々の歩んできた
歴史を飛び越えず、旬の老いを生きてい
る人への敬意を忘れてはならないと思っ
ています。

田中…名古屋別院では一九九一年頃から、
年輩で定例法話に来られなくなった人
たちとのご縁を切らさぬよう事業を模索
しました。寺西さんをはじめとする教区
内僧侶に協力をあおぎながら「外に歩み
出す教化」「出向いていく教化」として、
高齢者施設に向いて法話をする「巡回
法話」を行っています。

最近ではお坊さん漫才などの需要も高
いですが、型にはまった法話ではなく、身
振り手振りを交え、昔の歌謡曲と一緒に
歌ったり、ただ一緒にお茶を飲む時間を
過ごす僧侶もおられます。

寺西…私は法話後に利用者さん、介護士
さん、それぞれの方と両手を重ねて「ま
たお会いしましょうね」「身体を冷やさせ
ないようにね」などと、言葉がけをさせ
ただいています。表情や手の温もりか
ら、その人の心や健康の様子が伝わっ
てきます。それは施設を再訪する私自身
の楽しみにもなります。四季折々に身近な
話題を探り入れて、解りやすく、深く、や
さしくお話をさせていたたく。そのスタ
ンスの中に、互いの琴線に触れる出あい



緑の創設時から、施設の引き継ぎ、運営にあたり、父の遺志を継ぎ、施設を運営し続けている堂宮さん

があると思います。

高齢者施設では、毎日ほぼ同じ生活が
続いています。その中で「巡回法話」を
含めた外來の方々との触れ合う機会は、施
設も人所されている高齢者も大切にされ
ています。面会に来られたご家族に「今
日はお坊さんからこんな話を聞いたよ」
などと伝える光景を何度も目にしました。
「お坊さんってどんな話をするの？」と興
味深そうに尋ねるお孫さん。ほほえまし
い光景があります。法話についての話を
笑顔でされる様子を拝見して、ご家族が
お年寄りとの関係を見なおしたり、お年
寄り同士の会話が育まれる機会になっ
ていることが「巡回法話」の大切な点だと
感じています。

——施設の外にもお年寄りの生活がある
ことに気づきます。

小川…私のお寺の学区では、独居老人を
対象にした食事会や、定期的に喫茶サロ
ンを開いて、お年寄りの孤独化を避けよ
うとしています。隣近所のお年寄りや障
がい者などを独りぼっちにさせないよう
に、近くの誰かがさりげなく気にかける
が見守っていく「見守り活動」も進め
られています。

地域でのきめ細かい助け合いの仕組み
と意識が定着していけば、終末期の選択
肢が施設だけではなく、長年住み慣れた
地で可能になるかもしれません。そこ
では、お寺（僧侶）としてどうつながり、何
ができるのかが問われてきます。

堂宮…私が伺っている施設では、毎年春
になると施設の方がお年寄りを連れてお
寺に桜を見に来られます。身近な関わり
を通じて互いの連携をさらに進めてい

たらと思います。施設での「巡回法話」
をきっかけに、町の電気屋さんみたいな
お寺として地域に開かれることも願っ
ています。

寺西…目を向けるべき人は私たちの目の
前にたくさんおられます。普段の月忌参
りの中にも、夫婦、親子などの問題があ
り、高齢者の問題もある。そこに私たち
が正しく目を向けているのが問われて
いると思います。私たち自身が社会に開
かれていないと、ご縁は開かれなと思
います。

——課題の多い現状ですが、もっと自由
なお寺のあり方を展開していくチャン
スのようにも感じます。

田中…今後、寺院や門徒の家、葬儀会館
だけではなく、施設や病院など、地域の
いたる所で僧侶の活動が望まれると思
われます。別院職員としても、新たな場
所で新たな人と出あってワクワクしたり、自
身を含む現代人の苦悩を共に学ぶご縁が
作れたら幸いです。

堂宮…施設の中では、今まで自分と切り
離していた「老・病・死」の現実がリア
ルに感じられます。そのような施設での
法話は、お寺の法話と違って専門用語で
逃げられない場であり、私自身がどのよ
うにお聖教をいただいているのかを直に
問い返されます。それが私自身の問法に
対する意欲になっていきますし、とても有
難い機会だと実感しています。

小川…「一切の有情は、みなもって世々
生々の父母兄弟」といわれるように、ど
れだけ有縁を見出していくのかが大きな

課題だと思っています。施設も、老人福祉施
設だけではないし、ご門徒の法事や葬儀
だけが有縁でもない。実はあらゆる場面
場面に有縁を感じ取っていきけるかどう
か身を運び、目を開き、耳を傾ければ、思
いもかけない出合いが用意されているに
違いありません。その一つひとつの出会
いが自分の見つめ直しや、真宗の足元を
問う力になるのではと思います。



現在「巡回法話」の担当をして
いる別院社会事業部の田中さん

寺西…「巡回法話」に行かれたら、肩の力
を抜いて目の前の人に接していただき、そ
こでその人ひとりの人生に出あっていた
だければと思います。

私は一人ポツンと座っておられる方が
あれば、人肌を感じるほどの距離を保っ
て、視線を合わせてお話させていただき
ます。そうすると安心されるのか、どの
方も穏やかな表情に変わって穏やかに会
話が進みます。そんな不思議な、一人ひ
とりとの心のつながりが生まれます。

高齢者の方は、人生で自分が一番愛さ
れていた時、家庭人として社会人として
輝いていた時のことを宝物のように持っ
ておられます。それを私たちが少しでも
垣間見ることができた時には、心底から
嬉しくなります。高齢者施設を訪問され
る方は、そこに身を運びながら「生老病
死」を学び、その学びの中から其々の「い
のちの輝き」を見出していただけたらと
思います。